

62 P・J・デソーとその処置

デブリドマンについて

大村 敏郎

わが国の保険診療請求の中に記載されている処置のうち唯一フランス語がそのまま使われているのが「デブリドマン」である。

débridementと書くが、誰もデブリドメントとは読まない。創傷治癒には欠かせない考え方であり処置である。これを普及させたのは十八世紀後半のフランスの外科医ピエール・ジョゼフ・デソー (Pierre Joseph Desault, 一七三八―一七九五)であった。

創傷治癒には感染との戦いが常に付きまとうのだが、病原微生物の存在がまだ確認されていないうちに、異物及び病的な肉芽を排除して創を治そうとする着眼はすばらしい。

デソーのことはあまり一般には知られていない。自分

で文献を書き残していないために英米の医学史の本には登場してこないこともある。しかし、弟子のマリー・フランソア・グザヴィエ・ビシヤール (Marie François Xavier Bichat, 一七七一―一八〇二) がデソーの臨床講義をまとめて出版して広めたし、それに先立ってフランス革命で旧制度が崩壊して医学部も外科医学校もなくなり医学教育が暗黒時代に入った中で、デソーはパリのオテル・ドイユ病院にたてこもり、外科の臨床と教育を一手に引き受けて活躍した人としてもっと知られていて良い存在と考える。

彼のもとで多くの優れた外科医が育ったし、感化を受けた内科医も少なくない。フランソア・ペルシー(一七五四―一八二五)、アントアヌ・デュボア(一七五六―一八三七)、ドミニク・ジャン・ラレー(一七六六―一八四二)、ギヨーム・デュプユイトラン(一七七七―一八三五)が外科、ジャン・ニコラ・コルヴィザール(一七五五―一八二一)、ヴィクトール・ブルーセ(一七七二―一八三八)は内科で有名を馳せた。

そんな偉大な人物なのに、デソーの名は発音さえもわ

が国には正しく伝わっていない。ドイツ語經由で入ってきたからかデゾーと呼び慣らされている。Desaultは文字から見ればドウソーと呼びたくなるが、彼の母国フランスでデソーと呼んでいるのでそれに従うことにした。デゾーという名ならば鎖骨骨折の包帯固定法として「デゾーの三帯」を知っているという人も多いことだろう。その彼である。デソーが亡くなって丁度今年二百年を迎えた。この機会にデゾーに光を当ててみたい。

デソーの出生は一七三八年である。しばしば一七四四年と記載されるが、それはビシャーが出版した「デゾーの講義録」の中で間違えたことが広く伝わってしまったのである。ビシャーがデゾーに認められたのは鎖骨骨折の治療法の講義がきっかけであったという。

当時の外科は創傷と骨折が主体であった。デソーもその領域を得意としたが、そのほか甲状腺の摘出手術をてがけたり、腸の吻合を試みたり、肛門部の手術法を考案したりしている。

一七九五年医学教育制度が改革されて新しく健康学校（エコール・ドゥ・サンテ）として再発足したパリの医学

校の十二人の教授の一人にデソーは選ばれた。担当は外科である。外科（Chirurgie）という言葉の持つイメージを拭い去るためか、この時期「手術医学」という名前が使われるようになる。デソーはその年の六月一日にあつてなく世を去るのである。オテル・ディユ病院で活躍したデソーは同じ施設の中で亡くなったのに、革命後のこの時期にはオテル・ディユ病院はグランド・オスピス・ドゥ・リュマニテ（Grande hospice de l'humanité、人類愛大収容施設）という名前に呼び変えられていた。

社会も医学も変換する時期に大きな役割を果たした人物としてデソーから多くのことを学びたいものである。

（慶応義塾大学医史学研究室）